



「地域とともに歩む病院」を目指して

— 津久見中央病院が果たす

高齢者救急対応の新たな役割 —

津久見市医師会立津久見中央病院
院長 石川 浩一



津久見市では、全国平均を上回る速さで高齢化が進んでいます。住み慣れた地域で安心して暮らし続けたい―それは多くの市民の願いです。そのため、津久見中央病院では「高齢者救急対応」に重点を置いた体制を整えています。とくに当院では、高齢者の救急搬送症例のほとんどがそのまま入院に至っており、地域の「最後の受け皿」としての役割を担っています。しかし現実には、先月お伝えしたように、高齢の方が体調を崩して救急搬送され入院しても「退院後の受け入れ先がない」といった問題が生じています。

このような高齢者の救急対応では、医療の提供だけでなく入院直後から退院後の暮らしを見据えた支援が重要です。私たち医師・看護師・薬剤師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・管理栄養士・歯科衛生士・介護福祉士・検査技師・放射線技師・工学士・社会福祉士・事務職は、多職種協働でできるだけ早く自宅や施設へ戻れるよう支援しています。

その際に欠かせないのが、医療と介護の異なる専門職同士が情報を共有し、視点をそろえることです。お互いに理解を深め、共通の目標を持つことで、患者さんやご家族にとって最もよい選択肢と一緒に導き出すことができます。このため当院では、退院前にケアマネジャー・介護施設職員・訪問看護師・行政担当者などと話し合いを行い、退院後の生活を安心して送ることができるように準備を進めています。

また、個別の退院支援だけでなく、津久見市全体として、病院・医師会・介護事業所・行政・市民が一体となって話し合う場を持ち、実効性ある連携の仕組みをつくっていくことが重要です。津久見市に合った「地域完結型の医療・介護体制」を構築するためには、関係者全体で継続的な対話を続けていくことが求められます。

こうした地域ぐるみの支え合いを実現するためにも、私たちは「病院は治すだけの場所ではなく、暮らしを支える医療の拠点」という意識を持って日々の医療を提供しています。2024年度からは、「リハビリ」「栄養」「口腔」「意思決定支援(ACP)」「身体拘束の最小化」なども重視されており、日常生活動作(ADL)の回復や患者さんの生活の質(QOL)を支える視点も強化しています。

市民の皆さまにもお願いがあります。高齢の方は、体調を崩してから一気に状態が悪化することがあります。「いよいよ悪くなる前に」ぜひ早めの相談や受診を心がけてください。早期の対応により、入院や介護が必要になる前に手を打てることも少なくありません。

津久見中央病院はこれからも、「地域とともに歩む病院」として、皆さまの命と暮らしを支えていきます。高齢になっても、病気になるっても、津久見で安心して暮らせるように―病院のあり方を見直し、関係者と市民が一体となって築く地域医療を、これからも推進してまいります。次回からは、当院各部署からのお知らせをお届けいたします。